

Press-gang をめぐって

——Mrs Gaskell と Mr Hardy

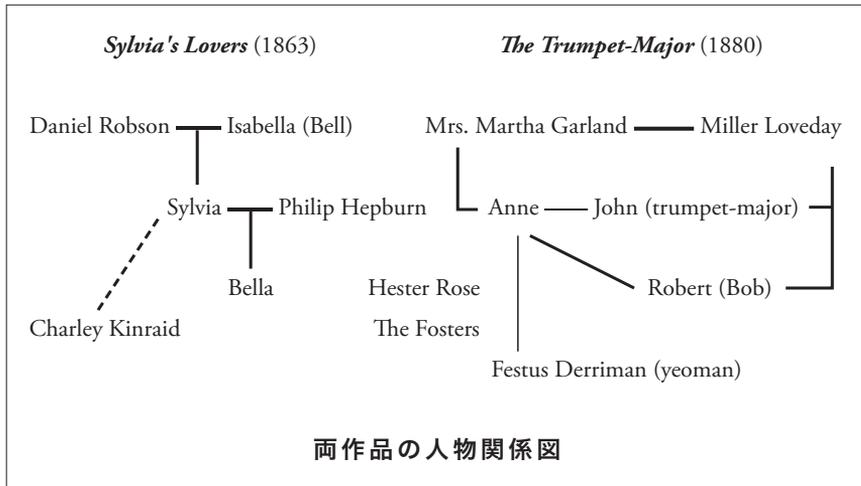
深澤 俊

今日はギヤスケル協会でお話しさせていただく機会をお与え頂き、有難うございます。ちょうど15年ばかり前のことですが、イギリスでのハーディ国際学会のあと、Knutsford はぜひ見ておきたいと思って、一週間ばかり町はずれのCottons というホテルに滞在して、このかわいらしい町を歩いたことがあります。ギヤスケル夫人が少女時代を過ごしたMrs Lumb's Houseの二階の窓からは、熊のぬいぐるみが見えましたし、Brook Street Chapelにあるギヤスケル夫人のお墓は周り一面墓石で、そこへ緩い斜面を他の人の墓石を踏みつけながら歩いて行ったことや、彼女たち夫婦がUnitarianであっても、結婚登録のためにはparish churchが必要で、ふたりが使ったSt John's Churchを見たことなど、懐かしく思い出しています。

今日お話しするのは「Press-gang をめぐって」というのですが、press gangとは強引な兵隊集めをした強制徴兵隊のことです。イギリスの徴兵制度はエリザベス一世時代の16世紀からあるのですが、この徴兵制度で評判の悪かったのは、とくにナポレオン戦争の時期のpress gangとして知られた海軍の強制徴用です。島国であるイギリスでは、フランス革命後の強力なフランス海軍を警戒して、政府は各地区の人口と港湾数にたいして人数割りを強制して、まるで人攫いのようにして強引な兵隊集めをしました。とくに船に強い人間を集める必要があったのです。この評判の悪いpress gangがMrs Gaskellでは*Sylvia's Lovers* (1863)で、Thomas Hardyでは*The Trumpet-Major* (1880)で使われて、作品構成上の重要な働きをしています。

この二つの作品は人物構成にも似たところがあって、しかもこれが小説作りの手の内まで見せてしまうところもあって私には面白いのですが、作中人物はまずcontrastiveというか、対照的に作られています。*Sylvia's Lovers*で言いますと情熱的な鯨撃ちのCharley Kinraidと、それとは対照的な沈着な店員Philip Hepburnがいて、このふたりがSylviaの恋人たちになるわけですが、Sylviaの両親も対照的に書かれていて、父親の農夫Daniel Robsonは単純で一本気でKinraidに親近感がありますし、母親のIsabella、愛称Bellの方はこれとは対照的な性格で、Philipに愛着をもっています。この対照性にまず第一の仕掛けがあるのですが、作者はこの仕掛けを見事に

操作して物語を作ります。そして多くの読者は作中人物の性格の違いであるとか、そこから生じる不和・葛藤のたぐいに、そして何よりもそこから繰り広げられる物語の展開に関心を寄せて読むことになるのです。けれども作者の方では同時に、これらの人物を取り囲む状況、社会であるとか時代であるとかにかなりの関心をもって描いているようなのですが、作者はこの社会の問題点を見ながら、何かしらもどかしさを感じているようにも思われます。



この小説で描かれている時代は18世紀末、場所はイングランド北部のMonkshaven、そのモデルとなっているのはヨークシャーのWhitbyです。この時期はイギリスに限らず、ヨーロッパ規模での激動の時代でした。フランス革命は進行中ですし、ナポレオンの指揮するフランス軍がイタリア諸国を征服し、さらにはオーストリア軍を撃破しようという時期です。イギリスはナポレオン軍の侵入を恐れ、極度に緊張している頃でした。しかし作者は、このMonkshavenを時代の激動からやや隔離された、特殊な場所として描いていきます。

Whether it was that living in closer neighbourhood to the metropolis—the centre of politics and news—inspired the inhabitants of the southern counties with a strong feeling of that kind of patriotism which consists in hating all other nations; or whether it was that the chances of capture were so much greater at all the southern ports that the merchant sailors became inured to the danger; or whether it was that serving in the navy, to those

familiar with such towns as Portsmouth and Plymouth, had an attraction to most men from the dash and brilliancy of the adventurous employment—it is certain that the southerners took the oppression of press-warrants more submissively than the wild north-eastern people. For with them the chances of profit beyond their wages in the whaling or Greenland trade extended to the lowest description of sailor. He might rise by daring and saving to be a ship-owner himself. Numbers around him had done so; and this very fact made the distinction between class and class less apparent; and the common ventures and dangers, the universal interest felt in one pursuit, bound the inhabitants of that line of coast together with a strong tie, the severance of which by any violent extraneous measure, gave rise to passionate anger and thirst for vengeance. A Yorkshireman once said to me, 'My county folk are all alike. Their first thought is how to resist. Why! I myself, if I hear a man say it is a fine day, catch myself trying to find out that it is no such thing. It is so in thought; it is so in word; it is so in deed.'

(Chapter I. Monkshaven)

首都の近く、つまり政治と情報の中心の近くに住んでいるから、南部諸州の住民は、他国民を嫌うような強い愛国心を吹き込まれることになるのか、あるいは南部の港ではどこも捕まる危険が遙かに大きいので、商業船の船乗りたちはその危険が当然のことと思っているのか、ポーツマスやブリマスのような町をよく知る人たちには、勇敢な仕事をして壮麗果敢な活躍をすることから、海軍に従事することが多くの人に魅力的なのか、とにかく南の人たちは強制徴用を粗野な北東の人たちよりも従順に受け止めているのは確かである。というのは、北東の人たちにとって、捕鯨やグリーンランド交易で、労賃を上回る利益を手にする機会は、最下層の船乗りにまで広がっていたからである。この船乗りは危険を冒してため込めば、自分が船主になることだって可能だった。周りにはこうした人間がたくさんいたし、こうした事実が階級差をあまり目立たなくしていた。共通の冒険と危険、一つの目的のための普遍的な利害が沿岸の住人を一つの強い絆で結びつけていた。そこから外部の暴力的な力で引き裂くことは、激しい怒りと復讐心をかき立てた。あるヨークシャーの男が、かつて私に語ったことがある。「うちの州の人間は、みな同じさ。まず考えることは、楯突くことさ。そうさ、わたしだって、誰かがいい日ですわねと言ったら、そんなことはないと思ってみたくなるね。考えるのも、言葉に出すのも、行動するのもそんなのさ。」

(原文・訳文のアンダーラインは筆者)

ここのヨークシャー方言は今でも健在です。かつて私は Sheffield でヨークシャー方言に接して多少面食らったこともあるのですが、作家の A.S.Byatt と東京の居酒屋で喋っていたとき、彼女がヨークシャー出身だと言うものですから、訛りがありませんねと言ったら、私は bilingual でこういうところで話さないだけで、と彼女に言われたことを思い出します。とにかくこのギヤスケルの小説では Monkshaven から見れば、ロンドンなどは遙か遠い土地になっていますし、作者にとって重要なのは、このヨークシャーでは独立の気風があつて国家の手先である press gang には反抗する風潮だった、つまり兵隊にとられるよりも自分たちで危険を冒して捕鯨をしている方が経済的に豊かにもなると考える社会だった、ということなのです。階級差もあまりないし、共通した意識を持った共同体がある。作者が生きていた時代にはすでに変化していたであろう緊密な共同体が、小説に書かれた時代にはまだ存在していました。Sylvia の家はヨーマン的な農家のように、Kinraid はグリーンランド海域での鉛撃ちです。どちらも大きな組織に頼らずに、生活できています。これらの人びとのコミュニティでは、国家のような大きな組織体への帰属意識が希薄で、税金なども払いたくない雰囲気です。しかし歴史の流れは一方では産業革命があり、エンクロージャーがあり、アメリカは独立するし、大革命どきのフランスとの対外戦争がありで、時代は近代化への方向へ急速に動いています。これは従来の土地所有階級を中心とした農業主体の国家から、市民階級に比重のかかった商業・産業国家への移行なのかもしれませんが、Sylvia の父 Daniel Robson はこの新しい国家体制には違和感を持っています。この Daniel たちのわだかまりを表現するに当たって、物語の展開を効果的にする材料として、ここでは press gang が使われているところがあります。Daniel は昔ながらのコミュニティを守ろうとして、press gang に捕らえられた人びとを解放したり、press gang が利用しているパブへ押しかけて、そこへ民衆が放火する原因となったりして、結果的に騒乱を起こした廉で処刑されます。もとは中世のロビン・フッド的英雄精神から出たものでしょうし、この感覚は地元の人びとの共感を得ますが、為政者の側からはとても認められるものではありません。これより前に Kinraid も帰国早々に press gang に狙われて抵抗し、怪我をしています。彼も Daniel 同様、かつての懐かしいコミュニティの一員です。この共同体では、昔からの経験がものを言いますし、べつに文字を知らなくても差し支えありません。Sylvia はこの中で育っていますから、文字や読書にあまり関心はないし、Kinraid に親近感を持つのは当然なのです。

これにたいして新しい時代の新興市民階級を表すのが Philip ですが、小説では

Sylvia は気が進まないのに Philip と結婚することになってしまう、それもうまくいかず、意外な事件があつてやつと理解しあえる結末を迎えるように小説は作られていくわけですが、これこそヨークシャーの旧共同体から近代市民社会への時代の変化に対応できずにいる、あるいは困難を感じている人間の当惑を表現しています。Sylvia の母親 Bell はこの新しい時代への流れを直感的に感じていたのでしょう。若い Sylvia は別として、体制のなかにどっぷりと漬かっている男よりも、ギヤスケル夫人がそうであったように、女の方が時代の流れをつかんでいたと言いたいのかも知れませんが、小説技法上は Daniel とは違った風に Bell を書く必要があつたのです。そうすることによって作品の動きが書きやすくなりますから。

一方 Philip の方は、新しい市民社会に帰属感と義務感のようなものを感じています。彼は商業資本主義体制に組み込まれているとも言えるのかも知れませんが、それによって巨大な利益を得るかも知れない資本家ではありません。ごく小市民的な、生真面目な人間なのです。そして、それなりの教育も受けている。これが新しい時代には必要で、店の商用でロンドンに派遣されるのも Philip です。Sylvia には好かれられないかも知れませんが、彼こそが新しい時代の人間像として表現されているように思われます。

この Philip をめぐって作者は、まさに Sylvia 的というか、個人レベルのプロットを組み込みます。それは、Kinraid が press gang に捕らえられる事件が絡むのですが、Kinraid が捕らえられた現場には、たまたま通りかかった Philip しかいなくて、Kinraid が Philip に、自分は press gang に捕らえられたけれども必ず彼女のもとへ帰るからと Sylvia へ伝えてくれと依頼した、あの出来事が描かれるわけです。これが小説の運びでは大きなものとなりますが、ここに登場する press gang は人の人生を変える運命みたいな無機的なもの、そしてある意味絶対的なものとして作品では使われています。press gang を出すことによって、物語が問題なく新たな展開を見るからです。この伝言を Philip が Sylvia に伝えなかったことは、Sylvia にとっても Kinraid にとっても裏切り行為なのでしょうが、このこと自体は大きな社会システムのなかでは大した問題ではありません。Philip にとっては Kinraid は恋敵ですから伝える気にもならなかったのでしょうか、実際問題として連れ去られた Kinraid は行方知れずになっていて、フランスとの戦争で戦死していることも十分あり得ることだし、Philip の性格からして Kinraid があまり信用できない人間で、Sylvia から引き離すのが当然だと考えられるからです。こうしたときに Sylvia の母親 Bell の考えが Philip には有利に働いて、Philip は愛する Sylvia と結婚する。けれども Sylvia

が変化しないかぎり、Sylvia と Philip の間がうまくいくわけではないのです。時代背景である歴史的、社会的変化をもう一方では見据えていながら、ギヤスケル夫人は Philip が Kinraid の伝言を Sylvia に伝えなかったというこの小さな問題を、プロットとして見事に操作します。小さな問題と言っても、Sylvia にとっては大問題で、これを知って Sylvia は反発しますし、Philip には大きな負い目になってしまいます。そして、彼の従軍志願、そして Philip による Kinraid の死線からの救出、Philip 自身の顔の火傷事故、そこから Philip のアイデンティティの喪失へと書き進められていきます。この裏切り行為が明らかになることで、小説は急展開することになります。小さな問題であったかもしれないものが、じつは大きな問題になるのです。そしてこの Philip の従軍に関わる切っ掛けを作った press gang の一員までもが面白いことに変化していて、たんに無機物的な存在ではなくて、パブでの行動なども人間として描かれています。

この *Sylvia's Lovers* から思い出されるのは、20 年ばかりのちに Thomas Hardy によって書かれた *The Trumpet-Major* (1880) という小説です。扱われている時代は *Sylvia's Lovers* の時代とほぼ重なります。場所はまさにイングランドの前線基地、南のドーセット州の海岸近くです。ドーセット州はギヤスケル夫人に言わせれば、Monkshaven とは対照的な、愛国的かも知れませんが、国王を身近に感じている地域です。しかもここは、むしろ産業革命や、市民社会的な変化の希薄な、むかし風の農業地域です。まさに *North and South* の南です。小説ではこの水車小屋、つまり製粉業を営む Loveday 家に John と Robert という 4 歳違いの兄弟がいます。この水車小屋はかつて manor-house として建てられた立派なもので、小屋という言い方は相応しくないでしょうが、この一角に風景画家の未亡人とその娘 Anne が借家人としてやって来ている。この Anne に粉屋の息子たち John も Robert も惹かれたのですが、弟の方の陽気で気軽な Robert、つまり Bobの方が Anne に若い頃、はっきりものを言ったらしくて、Anne もその気になって Bob に惹かれていた、こういった設定です。Bob は船乗りで家を空けていたのですが、女性関係に多少軽薄なところがある。久しぶりに帰宅して、婚約者だとして Bob が家に連れてきた女が兄 John の知る問題のある女であったり、Anne を追いかけ回して嫌われている、地主の甥の Festus を Bob は信用したりという失敗もしますが、その後始末をするのは生真面目な兄の John で、この兄が国王の守備兵ラップ隊長なのです。この兄弟の設定がちょうどギヤスケル夫人の Kinraid と Philip の対比とよく似ているのですが、

この John は弟思いのお兄さんで、彼も Anne のことを思っています、最後に今なら Anne が受け入れてくれると浮気な Bob に手紙を出して二人を結びつける人間です。Anne は John を信頼していたけれども、最後に Gratitude is not love, though I wanted to make it so for the time (Chapter XLI) ということが分かったと John に語ります。じつはハーディには love にたいして一つの考え方があって、passion でのぼせ上がった愛ではなく、‘camaraderie’ という good-fellowship を求めているところがあって、これが初期の作品 *Far from the Madding Crowd* (1874) の一つの結論になっています。しかし *The Trumpet-Major* の段階になると少し変わってきて、皆から信頼されていた John は愛で結ばれるのではなく、軍人としてスペインで戦死するのです。ナポレオン戦争の時期のイギリスの雰囲気では、この方が現実味があったでしょう。

この船員上がりの Bob を、press gang が捕まえに来る場面があります。これは嫌がられている Festus が知らせたからなのですが、Bob はうまく身を隠してしまいます。しかしこれは国家に反抗しているわけではなくて、捕まえられたくないから隠れるだけのこと。周りの人も、彼を手放したくないから彼に協力します。このハーディの press gang は無機物的ではなくて、捜索に失敗して帰るときも、自分たちの行動予定を正直に教えてくれたりする、人間的なところがあります。Bob の方でも press gang からは逃れられたものの、思い直して、近くに帰省していた Captain Hardy を訪ね、志願して Victory 号の水兵にして貰うのです。(この Captain Hardy はとくに地元では有名な実在の人物で、Trafalgar 沖海戦で戦死する Nelson 艦隊の旗艦 Victory 号の艦長です。) この Bob の気持ちは press gang によって強制的に連れて行かれるのには反発するけれども、国家や共同体に違和感があるわけではないのです。この小説では Captain Hardy ばかりか国王 George III も登場します。夜中に国王の一行が近くを通るといので、村人たちは午前 3 時半、夏でしたから夜も明けたのですが、正装して出迎えるのです。

Then there arose a huzza from the few knots of watchers gathered there, and they cried, ‘Long live King Jarge!’ The *cortège* passed abreast. It consisted of three travelling-carriages, escorted by a detachment of the German Legion. Anne was told to look in the first carriage—a post-chariot drawn by four horses—for the King and Queen, and was rewarded by seeing a profile reminding her of the current coin of the realm; but as the party had been travelling all night, and the spectators here gathered were few, none of the royal

family looked out of the carriage windows. It was said that the two elder princesses were in the same carriage, but they remained invisible. The next vehicle, a coach and four, contained more princesses, and the third some of their attendants.

‘Thank God, I have seen my King!’ said Mrs. Garland, when they had all gone by.

(Chapter XI)

そのときそこに集まっていた、数は少ないが見物人の群れから歓声が起こって、人びとは「ジャージ王万歳！」と叫んだ。一行は並んで通過していった、これは三台の旅行用の馬車で、ドイツ軍団の一分隊によって護衛されていた。アンは最初の馬車をのぞき込むように言われた——四頭立ての駅馬車風で——国王と后きさきのためのものであり、彼女にはこの王国で現在使われているコインを思い浮かべる横顔を見るという、報いがあった。一行は夜中旅をしていたし、ここに集まった見物人も少なかったので、王家の人びとは誰一人として車の窓から外を見てはいなかった。二人の上の王女も同じ馬車に乗っているということだったが、この二人は見えなかった。二台目の車も四頭立てだったが、ほかの王女たちが乗っており、三台目の馬車にはお付きの人びとが乗っていた。

「有難いことに、王様を見たわ！」と、一行が通り過ぎるとガーランド夫人が言った。

しかもこの一行は国王の趣味で、質素な馬車に乗っているのです。このような国王の情報は、警護の軍に関わっているラップ隊長の John から伝えられ、水車小屋に住む人びとにとっては国王も、国家も身近な存在です。Bob が press gang から隠れたのも一種の気まぐれにすぎません。海軍入隊後の Bob は Portsmouth である女性と結婚する気になりますが、これも気まぐれで、やがて John に手紙をよこして Anne に戻ると言ったりする。結局はそうなるわけですが、Bob は海軍では lieutenant (大尉) に昇進します。Sylvia's Lovers の Charley Kinraid も無理矢理拉致されていやいや海軍に入ったとは言え、Monkshaven を離れれば国家の一員です。Sylvia の結婚を知った Kinraid はのち金持ちの商人の娘と結婚しますが、この Kinraid 夫人が Philip 夫人である Sylvia に、夫が戦地で命を救われたとお礼に来たときには captain (大佐) に昇進しています。階級としては Kinraid の方が3階級上になりますが、この二つの小説でこの階級を比較することは必要ないでしょ

う。ナポレオン戦争の頃のドーセットでは敵から自分たちをいかに守るかが、重要な問題でした。このラッパ隊長 John は女性からはある意味、面白みのない人間ですが、生真面目で信頼できる生き方こそが共同体のなかでは必要だったのです。John にとっては Bob も Anne も、子どもの時から面倒を見る対象でした。Bob が気移りしているときに、John は自分が Anne と結婚しようと思いはしますが、むしろ Bob の幸福の手助けをすることに傾倒し、そのうえ Anne の一貫した態度もあったので、John は自分のことよりも Bob と Anne を結びつけることになる。かつては 'that weathercock, Master Bob' (Chapter XXXVII) と父親に言われた Bob も 'I'll be a new man.' (Chapter XXXIX) と、兄 John に誓うことになって行くのです。

ドーセットは気候温暖で、不安定な要素はありますがある意味豊かな農業社会です。そのためか、のちの社会的、経済的な変化にしても *Sylvia's Lovers* とは違って、農業社会のなかでの不調和と階級差の発生という現れ方をします。ハーディののちの小説、例えば『テス』などでは yeoman 階層が没落して大問題になっていますが、*The Trumpet-Major* の段階では yeomanry である Festus は個人としては嫌われていても、階層としてはまだ健在です。ただ、個人としては浪費家で伯父の Farmer Derriman から嫌われていて、この伯父の財産はたった一人の親族である甥 Festus のところへは行かずに、一途な性格で着実な Anne の手に渡ることになります。ハーディがこのように Festus を描いたのは、ひょっとすると yeomanry の将来の没落を匂わせているのかも知れません。その不安定性を感じているからこそ、John のような地味ながら安定した人物が描きたくなっただけなのでしょうか。

Sylvia's Lovers に戻ります。出世した Charley Kinraid は Sylvia の世界から離れてしまっていますが、重要な役割は Philip にたいする恩義を妻に伝えるに行かせたことです。つまり Philip 的なものの意義を、Sylvia に感じさせる切っ掛けを作ったことなのです。繰り返し申し上げますが、Sylvia は本質的に産業革命以前の農村社会の人間です。母親のように将来にたいするぼんやりした直感があるわけでもなく、父親のもつ直情的な古い感覚の人間に近いのです。これはヨークシャー的と言ってよいのかも知れません。ギヤスケル自身もこの感覚には郷愁を覚えていたのでしょうし、彼女のブロンテ姉妹にたいする親近感も、かつてのヨークシャーにあった、お互い共通したロマン性でもあったように思われます。ただ、Bradford を含むヨークシャーは、いち早く産業革命を成し遂げた地域です。小説の Monkshaven である Whitby は辺境という側面もあって、その余波がすぐに到達したとは申せませんが、Manchester

に住むギヤスケルには懐かしい古い社会が消えていく寂しさと同時に、新しい時代に順応しなければならぬことの難しさの感覚があったに違いありません。しかもこの順応は決して楽しいことではないのです。Sylvia が Philip から読み書きを学ぶことに気乗りしないことにも、これが象徴的に表現されています。Kinraid なら父親と共通点を持っているし、Sylvia が彼に惹かれるのはある意味当然なのですが、それは後ろ向きの夢のようなものです。新しい時代には、その時代を受け入れるしかないのです。これを小説技法としては、気の進まない Philip を受け入れるように表現しましたし、そういう状態を作るのにギヤスケルには press gang が都合がよかったのです。press gang は有無を言わせぬ運命みたいなものだからです。それによって Sylvia の状況は一変します。Philip の裏切りの問題よりも何よりも、Kinraid は消えてしまうのです。この新しい事態で Sylvia には周りに妥協するけれども、自分を殻に閉じ込めるしかないようです。ここで作者は思い切った策に出ます。それは Philip のアイデンティティを失わせることです。事故で容貌の変わった Philip には、St. Sepulchre の養育院しか受け入れ場所はありません。つまり市民階級主体の新しい秩序からの脱脚です。この Philip が故郷再訪を果たしたとき、彼には自分を守る殻すらなく、一途な心しか残っていないのです。Philip は自分と Sylvia との間に生まれた幼女 Bella が高波にさらわれたのを救い、Philip の心を知った Sylvia と和解するところで話は終わります。最後のテンポの速さはまさに小説的語りですが、そうかと言って Sylvia は新しい市民階級の秩序に順応できたわけではありません。そうした殻をはぎ取られてしまった Philip の心に、反応したのです。これは感動的な解決ですが、社会的広がりをもった普遍的な問題ではなく個人レベルの問題です。ギヤスケル夫人には感じられていたはずの、新しい時代への順応の問題は、この小説世界で Sylvia には解決できないことでしたし、そのため彼女は早死にし、娘の Bella は Philip を認めていた同僚で小市民の Hester Rose に育てられ、店の経営者でもあり銀行家でもある Foster 家から財産を分けて貰い、その一族と結婚して可能性を秘めたアメリカに移住します。作者のギヤスケル夫人がこのような形で未来への展望を開いたのも、時代に対処する方策までは描く確信が持てなかったからなのだと思います。

* 本稿は第 27 回日本ギヤスケル協会大会（2015 年 10 月 3 日 於名古屋大学）での講演に加筆修正を加えたものである。

（中央大学名誉教授）

Abstract

Press-gangs and Mrs Gaskell, or Mr Hardy

Suguru FUKASAWA

Press-gangs were used by the Royal Navy as a means to recruit seamen into naval service especially during the Napoleonic wars. They were crude and violent, and provoked bitter resentment in many places. In *Sylvia's Lovers* the farmer Daniel Robson, Sylvia's father, heads a mob against them and is hanged. Kinraid, her lover, is carried off by the press-gang. They are old-fashioned heroic characters, while Philip Hepburn, another lover of Sylvia, is a composed, hard-working shopkeeper of a rising class, whose treachery of not sending Kinraid's message to Sylvia when Kinraid is carried off is the main motive of the plot. And this is well written, while the social and historic vicissitude goes rather underneath.

Thomas Hardy also wrote the press-gang in *The Trumpet-Major*. The two brothers are also contrastive like passionate Kinraid and composed Philip. But the cheerful, lighthearted sailor Bob is well guided by his composed brother, Trumpet-major John. Bob once escapes from the press-gang, but afterward he visits Captain Hardy and asks to enter on board the Victory. Is this only because he lives in the southern counties with a strong feeling of a kind of patriotism?